
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 54

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1061. ホテルマネジメントスクールへの提言
- 1062. ピアノ協奏曲への関心と夢の振り返り
- 1063. 埴谷雄高著『死霊』
- 1064. ある企画の始まり
- 1065. 想像力について
- 1066. 日本性の獲得へ向けて: 言葉と自己の偏在性
- 1067. 遍く幸福感から
- 1068. 友人との夕食より: 言葉の呪術的側面
- 1069. ひたひたと近寄る存在と夢
- 1070. 春らしい一日の中の不必要な焦り
- 1071. 作曲への取り組み方
- 1072. 二つの夢から
- 1073. 言語的麻痺
- 1074. 楽譜の筆写から得られたこと
- 1075. 作曲実践と翻訳書について
- 1076. 春風が薫る頃に思うあの冬
- 1077. 去年の今日
- 1078. 多感覚的文章と探究活動について
- 1079. 教育への関与を示唆する夢
- 1080. 「サンプルアプローチ」を導入した大学入試の選抜方法について

1061. ホテルマネジメントスクールへの提言

昨日は、夕食後から「タレントアセスメント」のコースで課せられている論文の執筆に取り掛かった。その前日に計画していたのは、この課題を昼食前から取り組み始め、午後から夕方まで文章を執筆するというものであった。しかし、蓋を開けてみると、課題に取り組み始めたのは夕食後からだ。午前中も午後も、自分が読みたいと思う書籍を読んでいたため、そのようなことになった。

具体的には、イヴァン・イリッチの“Deschooling Society (1970)”とダイナミックシステム理論に関する“Dynamical Psychology: Complexity, Self-Organization and Mind (2009)”を読み続けていた。午前と午後を使って集中的に読書を行うことができたため、イリッチの書籍は初読が完了し、後者の書籍に関しても一読目が終わりそうである。

そうした読書を終えて、ようやく課題に取り組み始めた。今回の課題は、ルーワーデンという町にあるホテルマネジメントに特化した専門大学のアドミッションに関して、データ分析に基づいた助言を提供することである。この学校のアドミッションを担当している二人の人物が、「タレントアセスメント」のコースの最初にゲストスピーカーとしてやってきて、ホテル業界の話やこの大学が提供するホテルマネジメントのプログラムについて色々と説明してくれた。

大変興味深い内容のプレゼンを聞きながら、世界には色々な職業があり、そうした職業に特化した学校があるのだと感心させられた。今回の課題は、この学校の学士過程に入学してくる生徒の選抜に関して、既存の評価手法のどこか優れており、どこに改善の余地があるのかを分析し、提言を行うというものである。

コースが始まる前に、担当講師のスーザン・ニーセン先生が、251名の志願者のデータを私たちに共有していた。昨日改めてそれを眺めてみると、分析しがいのある量であることに少々面食らったが、一つ一つの項目をつぶさに見ていくと、色々と発見があるものだ。ホテルマネジメントに特化しているがゆえに、会計学の試験やホスピタリティの試験があることは興味深かった。大量に存在する評価項目の一つ一つに溺れてしまうと、何も分析ができないと思い、大きな視点を持ちながらデータを眺め、リサーチクエスチョンを立てた。

この学校は、数多くの試験を志願者に課しているのだが、中でも「モチベーションインタビュー」が最終評価に占める割合が50%もある。また、筆記試験の中にも、性格類型テストと合わせて、モチベーションの性質を測定するテストがある。こうしたことを考えると、この学校は、志願者のモチベーションを重視していることがわかった。これはどの学校でもそうかもしれない。

ただし、私が注目していたのは、この学校が活用しているインタビューの質であり、モチベーションを測定するための筆記試験の質であった。「質」というのは、それらのインタビューや筆記試験の結果が、志願者が入学後に発揮する学業パフォーマンスとどれだけ結びついているのかの度合いを示す。

今回、この大学から私たちに依頼があったのは、既存の入学審査の評価手法が、入学者の学業パフォーマンスを適切に予測できているのかを調査してほしい、というものだった。その観点から、私は、この大学の入学審査で最も大きなウェイトを占める「モチベーション」という構成概念に着目し、それを測定しようとするインタビューと筆記試験の質に着目することにした。

手元にあるデータは、モチベーションを測定する筆記試験の四つの項目の結果とインタビューの総合評価、そして、入学後の最初の学年における成績評価、最初の学年における取得単位数、退学の有無である。筆記試験の四つの項目とインタビューの総合評価を独立変数とし、後者三つを従属変数として分析をすることにした。私は統計学にそれほど明るくないので、古典的な統計手法を用いる際は、常に専門書が必要となる。

昨日も、専門書を片手に、基本的な概念をもう一度確認しながらデータを分析を進めていた。結局、私が分析したいことは、筆記試験の四つの項目とインタビューの総合評価が学業パフォーマンスを表す三つの指標を適切に予測するものなのか、ということである。この問いに答えるためには、単純に回帰分析を活用しようと思う。そして、もう一つの問いとしては、筆記試験の四つの項目とインタビューの総合評価がどれだけの相関があるのか、ということである。

これは非常に早急な考え方だが、最初にこの大学の入学評価の仕組みを見たとき、モチベーションを筆記試験とインタビューの二つの手法で測る意味があるのか、ということに疑問を持っていた。

つまり、どちらか一方で十分なのではないか、という考えがあったのだ。おそらく、筆記試験で測ることのできるモチベーションの側面と、インタビューで測ることのできるモチベーションの側面が異なるということ为前提に、これら二つの方法を採用しているのだろう。

四つの項目とインタビューの総合評価の相関関係を見ただけでは、二つの手法が同一のものを測定しているということが明らかにならないだろうが、とりあえず分析の手始めに、それらの相関関係を見てみることにする。

今回のデータ分析では、プログラミング言語のRを活用することになるが、この一年間でRを活用する機会が多かったため、今ではとても馴染みのある言語に感じるようになった。作曲に関する音楽言語もRのように親しみを感じられるようになる日が来ることを願う。2017/5/13

1062. ピアノ協奏曲への関心と夢の振り返り

昨日の午後から一貫して、不思議な感覚が自分を包んでいる。明晰な意識を通じて、静かに自分の内側に留まっているような感覚だ。

天気予報の情報をもとにすると、今日も雨のはずなのだが、早朝のこの時間帯にはまだ雨が降っていない。それどこから、起床直後に遠くの空に見えた不気味な雲の大群が消え去り、今は薄い青空が広がっている。その証拠に、真っ黒い鳥が空を飛んでいる姿が良く見える。今朝は早朝の六時に起床し、早朝の習慣的な実践を行った後、六時半から仕事を開始した。

仕事の始まりとともに、私はいつも音楽をかける。ここ最近、モーツァルトが残した一連のピアノ協奏曲の素晴らしさに感覚を開かされている。以前日記で書き留めていたように、モーツァルトが残したピアノソナタについては、確かにそれらが傑作であり、美を顕現したものであることは間違いないと思うのだが、私はベートーヴェンのピアノソナタが持つ建築的かつ体系的な美の方により惹きつけられていた。

だが、モーツァルトが残したピアノ協奏曲は、少し話が別であった。また、ブラームスが残したピアノ協奏曲に対しても、私は今関心を示しつつある。仕事の合間合間に思わず手を止めてしまう曲は、

私の内側の何かと共鳴しているはずであり、それらの曲が誰の作品であり、内側の何がそれらの曲と共鳴しているのかを少しばかり考えるようなことが度々ある。

この数日間、思わず手を止めて聴き入っていたものの中に、ブラームスのピアノ協奏曲がいくつかあった。ピアノソナタのみならず、ピアノ協奏曲の持つ美的体系については、今後時間をかけながら探究を続けていきたい。

書斎の中を流れる音楽を聴きながら、昨夜の夢の内容を振り返っていた。昨夜の夢の中で最も印象に残っているのは、私が制限時間に追われて英語の文章を書いている場面であった。なにやらGREのような試験を受けている場面に出くわし、数十分ほどの極めて短い時間の間に、十分な中身と構成の整った英文を大量に書かされるということが要求されていた。そのような短時間の間に、建築的に文章を書くことなど不可能であり、夢の中の私は焦燥感と同時に失望感を覚えていた。

起床してから幾分時間が経ってしまったため、その他の場면을思い出すことができない。今日から就寝の際に、ノートを寝室に持ち込み、就寝に向かう際に閃く考えを書き留め、起床直後に夢の内容を書き留めておけるようにしたいと思う。

時々私は、寝室で横になったにもかかわらず、そこで思わぬアイデアを閃き、再び書斎に戻るといふことがある。そういう時に限って、寝室と書斎を何度か往復することになるため、寝室にノートを置いておけば、書斎と寝室の往復を避けることができる。

今日は午前中から「タレントアセスメント」の課題に取り掛かり、データ分析と分析結果をまとめた文章を執筆していきたい。今日は書物から離れるような一日とし、夕方から作曲の学習と実践に取り組みたいと思う。2017/5/13

1063. 埴谷雄高著『死霊』

そこにあったのは興奮だった。不気味な興奮が背筋を駆け上っていったのは、これが初めての経験かもしれない。そのような出来事に本日見舞われた。今日は今朝から論文を執筆していた。早朝に、カントの“Critique of Pure Reason (1781)”を1ページほど筆写すること意外、今日は書籍や論

文に目を通すことはなかった。ただ、昨日読んでいた辻邦生先生の文章を少しばかり私は振り返っていた。

その書籍は、辻先生のエッセイであり、ちょうど先生がフランス留学を終えてから執筆したものだと思う。そのエッセイ集の中に、小説家の埴谷雄高氏についての記述があった。以前、私はどこかで——その時も辻先生の書籍からだと思うが——、埴谷氏の名前を目にしていた。当時は特に埴谷氏について知ろうと思うようなこともなく、埴谷氏の存在は空気のように私の目の前を素通りしていた。

しかし、昨日は、素通りしてはならない何かを感じていた。埴谷氏が残した最大の傑作『死霊』という長編小説のタイトルが、絵も言わぬ不気味な妖気を放っていた。それは恐ろしいほどに魅惑的な何かを秘めているように私には思えた。触ってはならないものに触りたいと思うようなあの感情、見てはならないものを見たいと思うあの感情が、私の内側を絶えず流れていた。

今日の昼食後、午前中に引き続き、私はプログラミング言語のRのコードを書き、データ分析に勤んでいた。データ分析のある箇所において、回帰係数を算出した瞬間、『死霊』という長編小説が突然頭の中で跳ね上がった。算出した回帰係数を論文に転載するよりも先に、私の思考と手は『死霊』という作品をインターネットで調べることに向かっていた。すると偶然、埴谷氏が存命中に残したドキュメンタリー番組を見つけた。

埴谷氏は、『死霊』という物語は、「虚体」から始まり「虚体」に向かうストーリーだと述べる。その時、私は、『死霊』というタイトルに不気味な妖気を感じていたのではなく、その作品の中心テーマである「虚体」という概念に「近づいてはならない近づきたい気持ち」を抱いていたのだ、ということがわかった。

「かつてなかったもの、そして、決してありえぬもの」が虚体の表面的かつ本質的な意味であり、『死霊』という作品の中で徐々に開示されていく事柄は、人間意識の発達への極致に向かう過程に他ならないということが、この作品を読まずして感じ取られた。

私が興奮を感じていたのは、この小説を読んでの興奮ではない。『死霊』という作品が持つ「虚体」という概念の力であり、それが人間意識の発達が到達する極致の姿であり、そうした事柄を小説と

いう表現形式で表すことができるということに対する興奮であった。つまり、小説の存在意義を生まれて初めて感じたことによる興奮と言っているかもしれない。

書斎の開放された窓から、白く小さなタンポポの花粉が部屋に入り込んできたのが見えた。滅多にないことだったので、その様子をじっと観察していると、ある瞬間に、花粉がピタリと空中のある一点で止まった。それは私の視線と同じ位置の高さだった。私には、その花粉が行き場のないままそこで停止しているように思えた。するとその花粉は、積み重なった論文の束の上にゆらりゆらりと落ちていった。そこがこの花粉にとっての行き場だったのだろう。

私は、辻邦生先生の『夏の砦』を最初から最後まで読みたいと以前から思っていた。なぜ欧州にその作品を持ってこなかったのか、少しばかり悔やまれる。次回日本に一時帰国する際に、実家からその作品を持ち帰ろうと思っており、その時に埴谷氏の『死霊』も購入して持ち帰ろうと思った。しかし、私は待てなかった。

この六年間の海外生活で一度もしたことがないことをした。先ほど、日本から初めて和書を取り寄せた。それが『死霊』だった。この作品は、12章で完成する予定だったが、結局、1945年から1995年の50年をかけて、第9章まで執筆したところで、埴谷氏は没している。このような仕方で仕事ができるのかと私は愕然とした。

森有正先生が芥川龍之介の作品を10年かけてフランス語に翻訳したのと同じぐらい、真の意味で仕事をするというのは、これほどまでに厳しいものなのだとことを突きつけられたような気がした。私はこの夏、『死霊』と共に過ごしたいと思う。2017/5/13

1064. ある企画の始まり

一人の人間が生きていく過程というのは、一つの主題を形作っていくことなのかもしれない。一つの主題を発見するというよりも、主題そのものを日々の行為を通じて形作っていくのだ。そのようなことを思うとき、私は、人生におけるちょっとした企画を立てた。その中身については、ここで書く必要はない。なぜなら、それはこれまでやってきたことの中にすでに現れているし、これからもやり続けることの中に現れていくと思うからである。

再度改めて、論文と日記について考えを巡らせていた。私にとって、論文と日記という二つの表現形式を日々の生活の中に溶け込ませることによって、それらは私の精神を安定させ、精神を研ぎ澄ませていく働きがあると実感している。つまり、論文と日記を執筆することは、私にとって等しい価値を持っている。これまでは、ややもすると、論文を執筆することの方が価値あることのように思っていた。

また、自分の言葉で自分の文書を書くよりも、他者が書いた書籍や論文を読むことを優先させてしまような自分がいた。だが、そうした態度は改めなければならない。一生涯にわたって先人から学びを得ていくことは必然だが、それ以上に、自分という一人の人間が持つ、たった一つの主題を形作っていくことの方が遥かに大切なのではないだろうか。

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』、埴谷雄高氏の『死霊』、ケン・ウィルバーの『進化の構造』が生み出されたように、一人の人間が長い時間をかけて産み出した作品には、その人固有の主題が刻み込まれている。この夏は、それらの作品のように、一人の人間が長大な時間をかけて残した書物や論文をゆっくりと読み進めたいと思う。ゆったりとした時間のあるときにしか成しえない読み方を試みたい。

そしてそれ以上に、私自身の日々の行為を通じて、自分なりの主題を形作っていくということを何よりも優先させていきたいと強く思う。一人の人間の日々の営みが、一つの大きな物語になりうるのだということを最近よく考える。生きるということが、その人固有の主題を形作っていくことである、ということを実証してくれるのは、まさに一人の人間の毎日の行為が一つの大きな物語を形成することにある。

そのように考えると、より一層、日記という表現形式の力を感じざるをえない。若干矛盾をはらむように響くが、小説のような文学形式にしかできないことを、日記を通じて成し遂げることも可能なのではないか、と思うに至る。その思いは、小説も日記も、物語を扱うという基底を共有しているという気づきからやってきた。

この夏に、未編集の日記を一気に編集したいという思いが湧いてきた。過去の日記を編集するのは私にとって、過去の自分を振り返ることにとどまらない。過去の自分を編み直し、再編成し、

新たな自己を形成することに繋がりうるような行為であると最近気づくようになった。編集を始めた初期においては、過去の文章を尊重するあまり、文章の誤字脱字を修正することだけにとどまっていた。

しかし、それは編集と呼べるような行為ではないだろう。過去の日記に対して、それを読む現在の自己から新たな文章を書き足していくことが重要なのだと思う。仮に、無数に枝分かれした植物が美しく見えるのであれば、必要に応じて、冗長さを感じさせない植物のつるのように巻きつく文章を書き足していくことが大切だ。2017/5/13

1065. 想像力について

昨夜は就寝前に、過去の記憶をあれこれと振り返っていた。特に、幼少時代の記憶である。記憶というのは、どこまで遡れるものなのか非常に興味がある。私のこれまでの一生を記憶の範囲とすると、やはり2歳か3歳までの記憶しか思い出すことができなかった。

昨夜は、まるでとても深い森の奥に入っていくかのように、辿れるだけ昔の記憶に分け入っていた。たいていの記憶は、これまでも何かのきっかけで思い出したことがあるものであったが、これまで一度も思い出したことのない記憶も湧き上がってきた。

記憶というのは、無意識のどこかに必ず格納されていることを知る。過去の記憶を辿っていると、ある時から、自分の意識がどの時期に生まれたのかに関心が向かった。どうやら、自己意識の芽生えと記憶で遡れる範囲が一致しているようなのだ。中には、自己意識が芽生える前の記憶にまで遡れる人がいるという話を聞くが、私の場合、そのようなことは今のところ無理である。

自己意識が芽生えたのと同じ時期の記憶までしか私は遡ることができない。また、記憶違いという言葉が象徴するように、私の記憶は時代が錯誤していたり、違う時間と空間の記憶が合成されていたりすることにも気づいた。しばらくの間、私はベッドの上で記憶を遡ることをやめなかった。このように記憶を振り返っていると、人間の意識は時間と空間をやすやすと超越することに気づかされる。これが想像力の根源なのかもしれない。

ちょうど夢の世界に入るか入らないかのタイミングで、夢と現実の境目について考えていた。私たちが「現実」と呼ぶものは、私たちが想像力を意図的に働かせることのできる範囲のことを指し、「夢」とは、私たちが想像力そのものの中に入り込んでしまうことなのではないか、ということを使った。そのように考えると、私たちの想像力というのは凄まじい力を持っていることがわかる。もしかすると、想像力は私たちに仕える存在というよりも、私たちが想像力に仕える存在なのかもしれない。

それを証明するのは、想像力そのものの中にある夢の世界において、私たちは夢の世界で進行することに寄り添っていくことしかできないということだ。意識を深める実践を積むと、夢の世界においても自己意識を保てる状態になるという。しかし、そうした状態においても、夢で起こる現象に私たちは身を委ねることになる。夢の世界で次々に現れる現象は、私たちの意識でどうこうなるものではないのだ。そうした現象は、私たちの意識を超えて動いていく生命力のようなものを持っている。

昨夜も、想像力そのものの中にある夢の世界に入り込んでいた。残念ながら、今日はその内容については覚えていない。だが、全く夢すらも見ない状態において、私たちの想像力はどのように働いているのだろうか。想像力は、そうした夢すらも見ない深い夢の世界すらも生み出すことができるのだろうか。人間の想像力というのは、つくづく興味深いものだと思う。2017/5/14

1066. 日本性の獲得へ向けて: 言葉と自己の偏在性

「ああ、もう自分は日本人なのだ」ということを突然知った。これは、自分の中に日本人性が骨の髄まで沁みわたっているということや、私が日本国籍を持っていることとは一切関係ない。それ以上に根が深い事柄である。自己の存在と日本の全てが切っても切り離せない関係にあるのだ。それは、文化的にも言語的にも精神的にもそうである。

昨日、とりわけ私は、日本語をもっと真剣に学ばなければならないと思わされた。これはもちろん、日本語の語彙を増やすということや、日本語の正しい用法を学ぶというような表面的なことではない。しかしそれでも、日本語の辞書が欲しいと思った。それを欲した理由は、日本語の一つ一つの言葉に日本性が宿っており、私はその一つ一つを自分の存在と照らし合わせながら確かめたいと思ったことにある。

最近、一つ一つの言葉が存在を持つような気さえする。そして、それは真実だろう。一つ一つの言葉には間違いなく、それと対応する存在が宿っているのだ。それらの一つ一つが日本性の現れであり、それらの総体が日本性に他ならない。

日本語を学ぶことの最良の道は、辞書を片手に言葉を覚えることでも、良質な日本語の書物を読むことでもない。確かに、それらを通じて私たちは、日本語の形式に関する学びを得ることができる。しかし、最良の道は、自身の内面を深めていくことにあるのだと思う。内面の深まりが、紛れもなく言葉の深まりと対応しているのだ。

昨日も、私は自分の日本語を疑い続けていた。ある時、それは自分の存在を疑うことに等しいということに気づいた。日本語の一つ一つに固有の存在が宿り、それらを発する私という存在は同様に固有の存在なのだが、私という固有の存在が、それら個別個別に存在を持つ一つ一つの言葉を紡ぎ出していくというのはどういうことなのだろう、ということを考えさせられていた。

「ああ、自己というのは遍在なのだ」とその時思った。言葉は本質的に、時間も空間にも縛られないものである。つまり、私たちの言葉は遍在的なのだ。そこから一步先に進んでみると、こうした遍在的な言葉と不可分の私の存在も遍在的と言えるのではないか、という考えが浮かび上がった。であるならば、私という存在は、どこにも存在していないのと同様に、あらゆる場所に存在しているのではないか、と思った。

どこにもないというのは、全ての場所にあるということなのだ。この気づきは、何か他の事柄にも当てはまりそうだ。私たちが何かを追い求めようとするとき、それはそもそも不要なことなのかもしれない。つまり、私たちが求めようとするものの全ては、あらゆる場所に実は存在しているかもしれないのだ。

ここで「場所」という言葉を用いたが、厳密には、私たちの存在そのものと言葉が遍在的であるというのは、場所にも空間にも縛られないということの意味しているため、「場所」という言葉には語弊があるだろう。いずれにせよ、自己の存在や言葉が、時間や空間を超越し、遍くところにあるということ、常に今この瞬間にあるということに気づけたのは、私にとって非常に大きな意味を持つことであった。

2017/5/14

1067. 遍く幸福感から

夕方、私は恍惚とした感情に包まれていた。仕事をしていて幸福感を覚えるのは、生きていて幸福感を覚えるのと全く同じことだとわかった。つまり、仕事を通じて得られる幸福感と生きることを通じて得られる幸福感が等質であるということだ。仕事から得られる充実感と生きることから得られる充実感が、限りなく等しいものであることに前々から気づき始めていたが、それらが完全に一致するものであるとは知らなかった。

仕事と一体化することによって得られる幸福感、生きることと一体化することによって得られる幸福感を得たとき、「所有とはなんだ」という問題にぶつかった。これは、今の私にとって、投げかけてはならない問いだった。というのも、「所有」という意味を考える手立てが整ってもしなければ、その問いを考えるための精神的な準備もできていないからである。「所有」という言葉の意味を直接的に考える代わりに、私は、「幸福感を得た」という自分の表現について見直していた。

先ほどの私は幸福感を「得た」のだろうか。それは、獲得され、所有されるような類いのものだったのだろうか。そのような問いが私の中に立ち現れた。幸福感というものは、本来、獲得されるようなものでも、所有されるようなものでもないはずである。それこそ幸福感というのは、全ての瞬間に遍く存在してしかるべきものである。そうではないだろうか。

幸福感を得ることが難しいのではなく、ありとあらゆる今という瞬間に存在しているはずの幸福感に私たちは麻痺しているのかもしれない。認識の眼が曇り、感覚が閉ざされることによって、常に今もこの瞬間に存在している幸福感を見出すことができず、それに触れることができないだけなのではないだろうか。

先ほどの私は幸福感を得たのではなく、常に自分を取り巻いている幸福感に気づき、それに触れることができたのだということを知った。そして、そのような性質を内在的に持つ幸福感は、獲得される必要もなければ、所有される必要もないと思った。繰り返しになるが、それはなぜなら、幸福感というものが至る所に偏在しているからだ。ありとあらゆるところ、ありとあらゆる瞬間に存在している幸福感を、なぜ獲得する必要や所有する必要があるのだろうか。

そんな必要はないだろう。また、幸福感がありとあらゆる瞬間と場所に存在しているということは、私たちは絶えず幸福感を感じながら生きることが可能だということも示している。そのように考えると、幸福感というものは、時間と空間を超越するような性質を持っていることがわかる。すると、そのような性質を持つ幸福感を感じた瞬間に、私たちは時間と空間を超越したことを意味するのではないかと思う。

やはり、私たちの存在の本質には、時間と空間を超越するような力があるのだ。いや、私たちの存在は本質的に、時間と空間を超越したものなのかもしれないとすら思う。

死者の存在を私たちがいつまでも感じ取れるというのは、それが時間と空間を超越しているからであり、存在するものはどれも時間と空間を超越しているのではないだろうか。そのような考えばかりが私の頭の中を駆け巡っていた。2017/5/14

1068. 友人との夕食より: 言葉の呪術的側面

昨日は、中国人の友人であるシェンと夕食を共にした。フローニンゲンの街の中心部にある日本食レストランに行き、三時間半ほど歓談を楽しんだ。シェンは現在所属している言語学修士課程を修了したら、いったん中国に戻り、ヘルシンキ大学かオスロ大学で博士課程の空きのポジションが出たらそこに応募し、近い将来に博士課程に進学することを志しているそうだ。

気づかないうちに夜の10時近くまでシェンとあれこれと話をしていた。ディナーテーブルに腰掛けるや否や、シェンから孔子の『大學・中庸・論語』の原著を贈呈してもらった。これはかねてからシェンに依頼をしていた書籍であり、ちょうどシェンが中国に一時帰国した先日、本書を購入してくれたのだ。その場で私は書籍の包みを開け、中身を見ると、簡略化された現代中国語ではなく、古典中国語で執筆されていることが嬉しかった。

私にとっては、簡略化された現代中国語よりも、古典中国語の方が姿形から意味を推察しやすいのでとても有り難い。ちょうどシェンの母が七月にフローニンゲンに来るとのことであり、その時にもまた中国の古典を購入してきてくれると申し出てくれた。なにやら中国では、新品の書籍でも極めて価格が安く、私がもらった孔子の書籍も日本で購入すれば二千元はするであろうと思われるが、中

国では二百円ほどで購入できるそうだ。シェンの厚意に甘え、老子の『道德経』と荘子の『荘子』を購入してきてもらうことにした。

とりわけ今の私は、老子以上に荘子の思想に惹かれるものがあるが、どちらの書籍も楽しみだ。中国の思想と日本古来の思想を本格的に探究するのは、随分と後になってからのことになるだろうが、その日はいつか必ずやって来ると予感している。

書籍の話を書きながら思い出したのは、一昨日、埴谷雄高氏の『死霊』を日本のアマゾンから購入しようとしたところ、購入画面に「オランダ王国にお届けできます」と表示されていたことだった。「そうなのだ、今私が住んでいるのは、国王が存在するオランダ王国なのだ」ということに改めて気づいた。私の感覚からすると、「国王」という存在がいることは不思議な感じがしており、「王国」という響きも少しばかり古風なように感じられた。

そこから仮に、「オランダに住んでいる」と言うのと、「オランダ王国に住んでいる」と言うのとでは、それを述べた本人の感情が全く違うだろうし、それを聞いている他者の感情も全く違うだろう、ということに興味を持った。今度日本に一時帰国する際に、初対面の人どこに住んでいるのかを聞かれたら、この実験を行ってみるのも悪くないかもしれないと思った。「オランダ王国に住んでいる」と言った本人とそれを聞いた人のどちらもきっと笑みを浮かべるだろう。

だが、少しばかり真剣に考えると、やはり二つの表現の中にある差異の源泉は注目に値するものだと思う。「オランダ」なのか「オランダ王国」なのかによって、それらの言葉が示す意味の範囲と性質が異なるように思う。それらの言葉は、異なるイメージを喚起し、それに相まって異なる感情を私たちに喚起する。やはり言葉には、驚異的な力が潜んでいる。そして、言葉の世界には、そうした呪術的とさえ形容できるような力を生む深層的な世界が広がっていることも実に興味深い。

シェンとの話の中で、この七月にギリシャを訪れ、八月にノルウェーを訪れる予定であることを伝え、観光客で混む暑い夏よりも、ギリシャへは春に訪れた方が良いということシェンから聞いた。八月にノルウェーに行くことは確定だとしても、七月の予定は少し変更するかもしれない。

シェンと長時間にわたって歓談を楽しみ、10時前にレストランを出た。すると、その時間でも、フローニンゲンの空には陽が残っていた。完全な闇の世界に入る前の境界的世界は、何とも言えない美しさを放っていた。2017/5/15

1069. ひたひたと近寄る存在と夢

埴谷雄高氏の『死霊』という作品が頭から離れない。この書籍を一昨日に購入して以降、何か不気味なものが近寄ってくるような感覚がする。この不気味さは、否定的なものというよりも、好奇心と呼ばれる感情の核にあるような、近寄ってはならないものに近づきたいという感覚質に近い。普段、仮に書籍をオンラインを通じて購入した際には、注文から書籍が届けられるまでの間は、その書籍に対して非連続的な感覚しか持たない。

確かに、書籍が届くのを待ち遠しく思うような瞬間が訪れることがあるが、それでも、注文という瞬間と書籍が届く瞬間は二つの点でしかなく、また、その二つの点の間には距離がある。物理的にも、注文した書籍はどこか別の場所にあり、それが実際に自宅に届けられるのを待つとき、注文時に書籍が存在する地点から自宅までの地点との物理的距離が少しずつ縮まっていくのを逐一気にしていない。

つまり、物理的な距離に関しても、私は、書籍の輸送を単純に二点間の非連続的な移動にしか捉えてないということだ。そして、精神的な距離に関しても、注文した書籍の存在を二点間の非連続的な移動として捉えている自分がある。しかしながら、今回注文した埴谷雄高氏の作品は全く別な感覚を私に引き起こす。『死霊』という作品が、日本からオランダに向けて、ひたひたと歩み寄ってくるのがわかるのだ。

薄気味悪い存在が静かに近寄ってくる様子は、私たちに不可避に訪れる死というものが歩み寄ってくる様子に似ているように思える。一方で、不気味なものを漂わせる『死霊』という作品に対して、私が好奇の目を向けていることは間違いなく、そうであるならば、「死」という現象の薄気味悪さの奥には、何か別の意味と感覚があるような気がしてならない。『死霊』という作品が、日本で梱包作業をされ、オランダに向かってくる足取りの一つ一つが、ひたひたとした音を立てながら私の内側に刻み込まれていくかのようだ。その足音を聞きながら、本書の到着を静かに待ちたい。

昨夜はまた不思議な夢を見た。起床からしばらく時間が経ってしまったため、すでに忘却の方へ去ってしまった夢の内容もあるが、それらは再び今後の夢の中で姿を表すだろう。それこそが、私たちの意識が持つ「再帰性」という特徴の一つだ。

昨夜は夢の中で、私はある高層ビルの61階に向かってエレベーターに乗り込んだ。そのエレベーターには私一人しかいなかった。地上からエレベーターが動き出した時、それは当然ながら、垂直方向に上の階に向かって行った。しかし、ある階を境にして、エレベーターが観覧車のような乗り物に変わり、上層階に向かう際に回転運動を始めたのだ。

エレベーターが観覧車のような乗り物に変わったのと同時に、壁面の大部分がガラスに変わった。回転運動に応じて、真下の地上が見えたり、水平方向に遠くの景色が見えたりしたのだが、その速度が極めて速く、大変気持ち悪かった。当初、私は観覧車のような緩やかな動きを想像していたのだが、それはネズミが回し車の中で走るような速度で動き始めた。

居ても立っても居られなくなった私は、目的階である61階に到着する随分手前の途中階に到着すると、エレベーターから逃げるようにして外に出た。外に出た瞬間、私は安堵感に包まれた。

一つの纏まったストーリーとして記憶に残っているのはそれくらいであった。もう一つ、何か重要なストーリーがあったのだが、それは忘れてしまっている。これからは、印象的な夢を見た際には、朝の習慣的な実践に入る前に、覚えている夢の断片を書き留めておくことを行いたい。印象的なシンボルを列挙し、それに付随するストーリーを簡単にメモしておくのだ。そうすれば、しばらく時間が経った後でも、夢の内容を想起することができるだろう。2017/5/15

1070. 春らしい一日の中の不必要な焦り

今日は少しばかり、目には見えないような精神的焦りを抱えているようだった。先日のサスキア・クネン先生とのミーティングで得られたフィードバックを元に、午前中に修士論文の手直しを行った。その作業は非常に順調に進み、あとはよいよ論文全体の細かな体裁を整える段階に入った。今週の水曜日や週末にそれらの作業を行えば、最終原稿のドラフトが完成することになるだろう。

一つの建築作業が一つの形として結実し、その最終成果物がまた次の建築作業の土台となることを実感している。論文を書き終え、少しばかりダイナミックシステム理論に関する専門書に目を通していた。しかし、そこで記述されている内容が私の頭にすんなりと入っていくことはなかった。いや、記述内容を概念的な次元で理解をしていたことは確かのだが、そのような次元で何かを学ぶことが全くもって取るに足らないことのように思えたのだ。

おそらく私は、概念的な次元で何かを学ぶのではなく、自分の全存在をかけて対象と向き合いたいという思いがあり、また、それにふさわしいだけの対象を見極めていく必要があるのだと思った。食欲もないのに食べ物を摂取するかのごとく、その書籍を計画していた箇所まで読み終えて、本を閉じた。

昼食を済ませ、少し一息入れたところで、フローニンゲン大学のメインキャンパスに向かうことにした。明日の講義に必要な発表資料を印刷するためである。メインキャンパスの図書館が工事を終え、内装が見違えるように綺麗になっていた。図書館の入り口の左手に、大学の名前と絵画的な模様が刻まれた石碑が壁にかかっているのを見つけた。私はそれをぼんやりと眺めていた。現代的になった図書館の設備とその石碑は対照をなしているように思えた。私が足を止めて眺めていたのは後者だった。

無事に目的の印刷を終えた私は、その足で行きつけのチーズ屋に立ち寄った。いつもは店長の年配女性と雑談を少しばかりするのだが、今日の私は何かに対して急いでいた。雑談をしないまま、私は店を後にし、春を迎えたフローニンゲンの街を足早に歩いていた。道行く人たちの中には、半袖の人が多く見かけられた。今日はそれぐらい暖かい。

しかし、私は秋用のジャケットを羽織りながら街を歩いていた。目に入る人も景色も、そしてそれらを眺めている自分さえも、あまり実体を持たないもののように映った。自宅に帰る道すがら、一瞬たりとも読むことと書くことから離れたくはないと思っている自分が可笑しくなった。日常の全てを、読むことと書くことを通じて考えることに充てたいというある種の衝動が、今日の不必要な焦りを生み出しているようだった。

歩きながら思ったのは、このように歩きながらでも読むことや書くことの続きを行うことは十分可能であり、何より考えることは何をしている時でも四六時中できるのだ、と自分をたしなめるような考えが浮かんだ。まさにその通りだと思う。

自宅に帰り、性懲りも無く、午前中に閉じた専門書を読み進めた。午前中よりは幾分ましになったが、それでもその書籍は自分の根底から何かを掴んでいくような対象ではないように思われた。この書籍を閉じ、辻先生と森先生の執筆した書籍を代わる代わる読み始めた。これらの書籍のほうが、ダイナミックシステム理論の専門書よりもはるかに人間の動的な本質を捉えているように私には思えた。そして、その歴然とした差を生むものの正体を、私はもう掴み始めている。

二人の書籍を片手にコーヒーを飲んでいいると、今日はコーヒーを飲む速度が普段よりもゆっくりとしたものであることに気づいた。先ほどの精神的な焦りとは対称をなしているように思えた。長い間それらの書籍を読み、夕食の時間を迎えた。私は、いつもより意識的にゆったりと入浴をした。私にとって、浴槽にゆっくりと浸ることは、不必要な精神的焦りを沈め、再び自分を取り戻しながら仕事に取り組むために不可欠なものだと改めて知る。2017/5/15

1071. 作曲への取り組み方

今日はこれから作曲の学習と実践に取り組みたい。これまで週末にまとまった時間を確保して作曲に取り組もうとしていたのだが、意外と時間が確保できなかつたりすることが多く、作曲の探究は非常に足取りが遅い。足取りが遅いことに関しては別段問題ではないのだが、問題は作曲と向き合う時間をきちんと確保できないことが時々があるということだ。週末にまとまった時間を取ろうとすると、逆にそうした意識が作曲に取り組むことから私を遠ざけているように思えた。

私は、何かの対象と真摯に向き合うときには、必ず毎日それと向き合いたいという抑えがたい思いが湧き上がる。作曲に関してもまさにそうした思いが湧き上がっていたにもかかわらず、それを抑える形で週末に作曲と向き合うとしていたことが問題であったことに気づいた。今日から、少なくとも夕食後の夜八時から夜九時は、作曲の学習と実践に充てたいと思う。まとまった時間の中で何かに一気に取り組むのは私の特性と合致しておらず、やはり毎日少しずつ取り組むのが私の特性に合っているのだと思う。

最近、日常の中に新たな習慣が入り込むことが多くなっているが、作曲の学習と実践は、日々の最後の習慣としたい。当面は、これ以上習慣的なものを設けないようにしたい。作曲に関しても、人間の成長と全く同じように、それが少しずつ深まっていく様子と共にありたい。

公園に植えられた花々がいつの間にやら咲き誇っていたように、大海をゆっくりと進む船が気づかない間に途轍もない距離を移動していたように、目には見えない進行を常に感じながら作曲に取り組みたいと思う。私が求めるのは、建築家が建築物を一つ一つ構築していくような建築性であり、生き物が一步一步成長を遂げていくような深耕性である。

先ほど、ふと、自分が執筆した日記に対する追記をさらに執筆していくような方法を採用しようかと考えた。というのも、いつもは自分の日記の誤字脱字などを確認し、自分でも読み難い箇所が文章にあった場合、それを整えることしか行っていない。だが、そのような編集作業をしていて時折思うのは、「もう自分はそこにいない」ということである。つまり、日記として書き留めたテーマに対して、それを数週間後に読み返す私は、もはや以前とは異なった新しい考えや感覚を持っているのだ。それを追記として書き留めておくことは、自分の考えや感覚をさらに深めていくことに有益であろうし、「追記の追記」という形で今後さらに内容を展開させていくことも可能になるだろう。

早朝と同様に、まだ私の頭の中には、埴谷雄高氏の『死霊』の影がちらついている。この長編小説は、結局未完に終わり、埴谷氏の構想が全て具現化させることはなかった。しかし私は、埴谷氏が50年をかけて一つの主題と向かい、一つの仕事を行ったという事実に対して、大きな敬意を表している。書き手の思索が深ければ深いほど、小説が哲学書としての様相を帯びることを知る。

そこから私は、科学論文も、書き手の思索が深ければ深いほど、そのテーマに関する己の思想が色濃く反映されることを知った。私にとって、思索を深めることの意義と論文を執筆することの意義はその中にありそうだ。思索を深めることを通じて論文の中に思想を宿し、論文を執筆することを通じて思索を深めていきたいと強く思う。2017/5/15

【追記】

結局、過去に執筆した日記に対して追記を書き加えることや、「追記の追記」という手段を採用しないことにした。自分でも抜け出せないほどの文章のつるに絡めとられるからである。

【追記】

上記の日記で述べている、「追記の追記」というのはプルースト的な文章執筆方法だと言えるだろう。毎回追記を書き記す必要はないが、それでも上記の日記で言及しているように、「その日記を書いた自分はもはやいない」というマイクロな発達現象が絶えず起こっているのであるから、ある記事に感化されるものがあればそれを追記として記しておきたいと思う。

上記の日記を読みながら、当時は作曲実践が毎日の習慣にまだなっておらず、週末にかろうじて少しばかり時間をとって作曲に向き合っていたことを知る。しかも、当時は曲を作るという段階には至っておらず、オンラインコースを受講したり、作曲理論に関する専門書を読むことぐらいしかしていなかったように思う。そこから一年が経ってみると、今このようにして曲を作ることが毎日の習慣になったことを嬉しく思う。

今は一日に最低でも一曲を作り、二曲を作る日も増えてきた。三曲作る日さえもある。いつか毎日執筆する日記の数だけ曲を作りたいと思う。いやむしろそれができないことの方が不思議だ。それが「日記的作曲」という性質を持つものであるならば、今毎日四つか五つの日記を書いているほどの曲が生み出せてもおかしくはない。それが実現される境地に至り、その境地すらもさらに超えていくようなところまで向かっていきたいと思う。フローニンゲン:2018/6/9(土) 15:18

1072. 二つの夢から

息を切らすような夢だった。昨夜の夢の中、私はホッケー場のような場所で、ホッケーなのかサッカーなのかよく区別がつかない競技をしていた。それは重要な試合のようだった。会場に遅く到着した私は、前半を観戦して過ごし、後半から試合に出場することになった。

私のチームが見せた前半の不甲斐ない戦い振りに対して、私は幾分苛立ちの感情を持ちながら、気持ちが高揚していたようだった。フィールドに入り、後半が始まるや否や、猛然と相手に向かい、後半開始早々に私は得点を奪った。メンバーは年長者も多い中、得点を奪った後の私は、メンバーを鼓舞するような罵声にも似た言葉を彼らに投げかけていた。そこからは、攻撃も守備も全て一人で行おうとするような孤軍奮闘を見せ、息を切らしながら、闘うことが何なのかをメンバーに伝えようとするような自分がいた。

そこで一度目が覚めた。時刻を確認すると、早朝の四時半だった。少しばかり時間が早いと思ったため、再び眠りにつくことにした。再度夢の世界に入ってみると、そこは銃撃戦が行われる戦場のよ
うな場所だった。しかし、それは屋外ではなく、近代的な建物の中だった。

日本人と思われる仲間と陣形を組み、身を守るために、悪だと認識する人間を次々に倒しながら私
たちは建物の中を進んでいた。陣形の最前線にいた私は、何か明確な基準を持って善悪を判断し
ているようだった。

建物の中にいる人間の国籍は多様であり、善悪に国籍など関係なかった。人間の内側の何か善
悪を規定しているのだ。その何かを元にして、悪人かどうかを一瞬にして見極めながら打つか打た
ないのかを判断しながら、建物の奥深へ進んでいった。すると、同じ建物であることには変わらない
のだが、戦場の荒々しさが一瞬にして消え去り、静けさが訪れた。

そしてこの場所が、中央がくり抜かれた特殊な形を持つ高層の建物であることがようやくわかった。
なにやら私は、この建物の上層階に在る一人の教授の部屋を訪れようとしていたのだと知る。その
日本人教授の部屋に入ると、無数の書籍が四方に並んでいた。また、部屋の中央に四つの長机が
置かれており、私は最前列に座った。

すると、私の後から数名ほど教授の元生徒だったらしい人たちが部屋に入ってきた。全員が席に着
き、全ての人が揃ったことを確認した教授は、簡単に挨拶をして、私の横に座った。そこからは、元
生徒の一人一人が自己紹介を始めた。私もこの教授の元生徒のようであり、この教授に対しては敬
意を持ちながら接していた。

そこで教授がふと、私の日記を昨日読んだという話をし始めた。私が日記を毎日執筆していること
を知った教授は、私の労をねぎらうような言葉を述べた。だが、私にとってその言葉は、日記ではな
く他の仕事にその時間を充てた方がいいということをほのめかすようなものに受け取れた。即座に、
この教授と私との間には、仕事に対する意味の持たせ方が違うのだとわかった。

それはお互いを理解し合えないような決定的な差であることがわかり、少し残念に思いながらも、教
授を立てるために空返事をした。全員の自己紹介が終わると、部屋を出て、全員で一階の食堂に
向かった。ほとんどの人はエレベーターを使おうとしていたが、私は五階で誰かと待ち合わせをして

いたため、誰も使わないような階段を歩いて五階に向かった。そこで少しばかり待ち合わせていた人とやりとりをし、一階に降りた。

そこは、吹き抜けの建物の中庭のような場所だった。そこで昼食の準備が始まり、私は昼食を盛る係りを買って出た。誰に何をどのくらい盛るのかを考えながら仕事を進めていった。全員分の食事を盛り終え、昼食が始まる寸前で私は再び目を覚ました。気づけば早朝の六時半に近づいていた。

2017/5/16

1073. 言語的麻痺

今日は早朝から、「成人発達とキャリアディベロップメント」のクラスに参加した。このコースもちょうど半ばを超え、最終課題と最終試験が少しずつ近づいてきている。

それにしても、このコースはいつも不思議な感覚を私に引き起こす。このコースは、産業組織心理学に属するものであり、産業組織心理学は経営学と心理学の横断的な学問領域でありながらも、私からしてみれば、そこで扱われる文脈が企業組織のものであるがゆえに、心理学よりも経営学に寄っているのではないかという印象を持っている。

私の学士号はまさに経営学であり、さらには、最初のキャリアも経営コンサルティングであったにもかかわらず、このコースで取り扱われる諸々の言葉が真新しく思え、たいいていの場合、それらが意味することがすんなりと頭に入っていない。つまり、いつもこのコースを受講している最中は、頭の中が真っ白になるような状態に陥るのだ。そこから私は、このコースで取り扱われる諸々の言葉を経営学に属するものと考えるのではなく、ましてや、心理学に所属するものとみなすのでもなく、自分にとって新しい言語領域だと思ふようにした。

一年目のプログラムの最後の学期に、まさかこのように理解が及ばない領域と遭遇することになるとは思ってもみなかった。また、そこで扱われる言葉が確かにこれまでの私には馴染みのないものであると同時に、産業組織心理学の研究手法と根幹の発想が、やはり旧態依然としたものであるという印象を拭うことができず、それが私の内在的な関心を弱めているのかもしれない。

このコースで取り上げられている論文を全て読んだが、どれも集団を相手とし、古典的な統計手法を活用することによって、一方向的な因果関係に基づくモデルを検証したり、何らかの介入手法の導入前後の状態を測定することによってその効果を明らかにしようとすることに留まっている。もちろん、そうした研究アプローチに一定の価値があることは確かだが、私の関心はやはり、個人の発達プロセスであり、集団であったとしても、発達の前後ではなく、そのプロセスを探究することにあるのだと思う。

発達を促進する介入手法の効果を測定する際も同じことであり、その前後を単純に比較するのではなく、介入手法を導入している最中に個人や集団でどのような現象が起こっているのかを見ていくことに強い関心がある。ひとたび、ダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスが発想やアプローチを学んでしまうと、旧態依然とした科学的な発想やアプローチに立ち返るのが非常に難しい。こうした思想的な相容れなさも、このコースで取り上げられている言葉の理解を妨げている要因なのかもしれない。

ただし、このコースで参考になっているのは、学習項目を毎回アクティビティを通じて学べるということだ。今回は、ある理論を活用して10分程度のコーチングセッションを他の受講生と実践した。私はトルコ人の留学生と共にエクササイズを行うことにした。いざクライアント役としてセッションを始めてみると、思わぬことに自分が課題意識を持っていることがわかったのは大きな発見であった。

いつも私は日記を書きながら、日記を執筆するというのはある種の「セルフコーチング」や「セルフセラピー」のような要素が入っていると思っていたのだが、やはりこれは一人称の実践であるがゆえに、固有の利点と盲点がある。

今回、そのトルコ人留学生とコーチングの対話を行ってみて、それが二人称の実践であるがゆえに浮き彫りにされた自己の新たな側面に気づかされたような思いになったのである。何をトピックとして話そうかと思って一瞬考えた時に浮かんできたものは、私の無意識が抱えている問題だったに違いない。他者と話し言葉を通じて行うコーチングやセラピーのような実践の意義を再確認した。2017/5/16

1074. 楽譜の筆写から得られたこと

「これを生み出すにはどのような手順を辿る必要があるのだろうか？」そのようなことを昨夜思わされた。

昨夜は、夜の八時から九時までの時間を使って、作曲の学習と実践をしていた。手元には、非常に親切的な作曲の実践書が三冊と音楽理論を実践と共に学べる専門書が一冊ほどある。昨日は、実践書のうちの一冊を取り上げ、書籍の項目順に作曲の実践を行っていた。ある意味、これは作曲に関する基礎的な知識と技術を習得するための作業である。

その後、私が意識的に行っている作曲学習法に移った。それは、ベートーヴェンのピアノソナタの楽譜を書き写していくという実践だ。厳密には、私は作曲ソフトを活用しているため、手書きで楽譜を書き写すのではなく、コンピューター上の五線譜に、一つ一つの音符や演奏記号を並べ、ベートーヴェンが残した楽譜を完全に再現するようなことを行っている。

これと似たようなことを、私は学術論文の型を学ぶ際に行っていた。実際のところ、今でも毎朝時間を取り、専門書や論文を手書きで書き写すということを行っている。これは英語だけではなく、一時期は日本語に関しても行っていた。これは今でもやらなければならないことだと思うのだが、特に二十代の後半に、硬質な語彙と文体を持つ和書を手書きで書き写すということを行っていた。

その際に取り上げていた書籍は、井筒俊彦先生の『意識と本質』と『東洋哲学覚書:意識の形而上学』であった。今はめっきり日本語の文章を書き写すことはなくなったが、どこかの機会に再び文体や語彙の鍛錬をしなければならないような気がしている。

自分が優れていると思う書籍や論文を書き写すのと全く同じように、ベートーヴェンが残した楽譜を昨日書き写すことを行っていた。作品順に、ピアノソナタ第1番からこの実践を始めたのだが、最も初期のこの作品でさえ、今の私にはどのようにすればこのような作品が生み出せるのか不思議でなかった。

全く手の届かないようなところに向かって私は歩き始めたのではないだろうか、ということも思った。しかし、一つ一つの音符や演奏記号を自分の手で配置し、少しばかり分析的な視点で眺めてみる

と、実に色々な発見があるものである。間違いなくベートーヴェンは、全ての音符や演奏記号を何らかの意図や意味に基づいて配置しているのは確かだろう。私にはそれらの意図や意味などまだほとんど掴めない。

だが、自分の手を動かしながら楽譜を復元させていくと、ベートーヴェンの意図したことの一端が感覚的にわかる瞬間が何度かあった。ある意味、こうした瞬間がなければ、目的地の見えない蜃気楼の中を、絶望感に苛まれながら歩くようなものだったと思うのだが、そうした瞬間のおかげで、私は少しずつ前に進めるような気がしている。

こうした地道な作業の中、時折、ベートーヴェンが楽譜で指示していることを無視したり、あえて変更を加えてみるとどのような音になるかを実験してみることは私の楽しみの一つだった。例えば、音を結びつける「スラー」と呼ばれる演奏記号を無視してみるとどのような音になるのかを実験してみた。すると、演奏の滑らかさが消え、無骨な音の流れに変わったりするという発見があった。それによって、「確かにそこにはスラーがなければならぬのだ」ということが分かったりしたのである。

また、時折現れるイタリア語の演奏記号には、とりわけ関心の目が向かった。「フォルテ」や「ピアノ」などの強弱記号やテンポを指示する速度記号、特に私が関心を持ったのは「発想記号」と日本語に訳される見慣れないイタリア語群だった。例えば、「*marcato* (はつきりと)」「*legato* (滑らかに)」などの記号は、まさにベートーヴェンの意図や意思が込められた言葉のように映った。昨日私が書き写した箇所には現れていないが、それ以降のピアノソナタの中で用いられている、「*appassionato* (熱情的に)」「*spiritoso* (精神を込めて)」などの発想記号には特に注目をしたい。

私がこのような発想記号を入れて曲を作ることは随分と先になるだろうが、こうした記号の中にベートーヴェンの意思が宿っていると思うと、今の段階でもそれらを見ながら探究を進めることはできない。

昨夜は、こうした地道な探究実践と共に、音符を理論に則って五線譜上に配置したり、無作為に配置したりするとどのような音の流れと総体になるのかを実験することに興じていた。今日も夜の八時から九時はそうした時間としたい。2017/5/16

1075. 作曲実践と翻訳書について

昨夜も夜の八時から九時の時間にかけて作曲の学習と実践を行っていた。日が沈む時間がとても長くなり、十時を過ぎてからようやく日が沈むようになっている。明るいの景色を眺めながら、作曲の実践書通りに作った音を聞いていた。本当に少しずつであるが、毎日自分が作曲に関する新たな学びを得、表現できることの幅が少しずつ広がっているのを実感する。

目には見えない静かな進行こそ、学習や発達の肝なのだと改めて思う。現在はもっぱら、ト音記号が付されている五線譜上の上段部分に絞って音を作るようにしている。今後しばらく上段部分に絞って音を作っていくことになるだろうが、常に下段部分との関係も頭の片隅に入れておこうと思う。昨夜もベートーヴェンのピアノソナタの楽譜を眺めていた。

すると当然だが、様々な拍子の曲があることに気づいた。その時、4分の4拍子や4分の3拍子など、拍子はどのタイミングで決定すればいいのかについて疑問を持った。現在は、4分の4拍子の五線譜上で曲を作っている。ベートーヴェンのような作曲家は、拍子をいつどのような基準で決定していたのだろうか。

表現したい主題や旋律があらかじめあり、それに合致する拍子を選んでいくのか、拍子を先に決定しておいて主題や旋律を表現していくのか、その辺りがまだいまいち掴めていない。そのような問いを生み出すことができたので、自分の内側で問いに対する回答とさらなる問い返しを待ちたい。

時間を遡り、昨日の午後、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』という作品が非常に気になっていた。私はこれまでこの書籍を読んだことがない。無性にブルーストが残したこの代表作を日本語訳で読んでみたいという気持ちが起こった。学術的な専門書に関して和訳か英訳の両方が存在するのであれば、私は迷わず英訳を選ぶ。それぐらい学術的な文章に関しては日本語よりも英語の方が親しみやすくなっている自分がある。だが、小説のような文章に関しては、依然として日本語の方が親しみやすいようなのだ。

実際に、この作品に関して、和訳と英訳のどちらを自分が読みたいと思うのかを吟味してみたときに、和訳の方に強く惹かれるものがあった。2010年あたりから吉川一義氏が岩波文庫から翻訳したもの

と、同時に高遠弘美氏が光文社古典新訳文庫から翻訳したのがあることを知った。現在時点において、どちらの翻訳も全ての章が完成していないのだが、二つの翻訳のうち、どちらを読むべきか少し迷っている。実際に購入するのは、今度日本に一時帰国する時になると思うので、それまでは大いに迷いながら検討をしたいと思う。

これは先日購入した埴谷雄高氏の代表作『死霊』にも当てはまるが、一人の人間が自らの存在をかけて長大な時間を通じて一つの仕事に打ち込むことは、とても尊いことのように思える。プルーストのこの作品もまさに、自らの存在を長い時間にわたって投げ入れた末に生まれたものだ。また、私はこの書籍を翻訳している二人の先生にも尊敬の念を持っている。自らの存在をかけて長きにわたってプルーストの作品と向き合い、長大な時間をかけながら翻訳をするというのはとても尊いことであり、価値のあることだと思ったのだ。

翻訳書をできるだけ読まないようにするという態度を変えるつもりはないが、訳者がその作品と真摯に向き合い、著者と訳者のどちらの存在も翻訳書の中で色濃く滲み出ているのであれば、それは原著を越すほどの価値ある一冊になりうるという新たな考えが芽生えている。翻訳書を読むのであれば、そのような珠玉の翻訳書だけを読むようにしたい。2017/5/17

1076. 春風が薫る頃に思うあの冬

春風が薫るような一日だった。昨日と同様に、今日も春の暖かさと穏やかさを象徴するような日であった。

午前中に修士論文の全体の体裁を整えていく作業を始めた。論文の“Abstract”を執筆し、“Introduction”から順番に文章を修正していく作業をいよいよ開始させた。“Introduction”は随分と前に書き上げていたものであり、本日改めて読み返してみると、その後の文章の展開から考えると修正しなければならない箇所が散見された。そうした箇所を削除したり、新たな言葉を与えていくことは、建築的な営み以外の何物でもなかった。

40ページにわたる全体のうち、7ページほどの手直しを加えたところで手を止めた。明日から四日間にわたって、フローニンゲン大学が主宰するアイデンティティの発達に関する国際会議に出席する。今回は発表者ではなく、会議の運営を支える者としてこの会議に参加する。この四日間に運動を

する時間的な余裕がとれないであろうことを考慮し、今日は昼食前にランニングに出かけた。曇り空の先日に走った時と比べ、今日の私の足取りはとても快調であった。走ることは、私の身体と精神の調整に不可欠であり、身体と精神のリズムとでも言うべき新たな調性を生み出すために重要である。

午後から再び仕事に取り組み、夕方から読書に耽っていた。私は、春の到来を喜ぶのと同時に、喜びの背後に存在する別の感情に気づいていた。春が近づき、春が過ぎ去っていくことは、あの得体の知れない、自己を押し潰すような異常な孤独さをもたらす欧州の冬が近づくことを意味していた。欧州で経験した初めての冬、筆舌に尽くしがたいほどの孤独さに苛まれることが何度かあった。このような経験は米国で生活をしていた頃にはあまり味わったことがなかった。ましてや、日本で生活をしているときなどには味わいようのないような孤独さであった。

去年はドイツ、フランス、スイスに訪れ、今年はおーストリアに訪れた。それらの地域には、私の関心を引くような場所が多々あったのは事実だが、結局、それらのどの国で生活をしようと、オランダで経験した孤独さと同じものと向き合わざるをえないことを知った。

欧州のどこで生活をしようが、自己を根底から震撼させるようなあの孤独さを経験することは間違い無いだろう。今の私はまだ、それらの孤独さがとりわけ欧州での生活において感じられる理由や要因を明確な言葉にすることができない。ただし明確なことは、それは今年の冬にまたやってくるということだ。また、自分の内面がさらに成熟を迎えた随分と先になって初めて、その孤独さの理由と要因を知ることになるということも明確だ。2017/5/17

1077. 去年の今日

夕食時、食卓の窓からぼんやりと空を眺め、去年の今日を振り返っていた。去年の今日に私が何をし、何を考えていたのかは、過去の日記を見ればそこに書いてある。だが、そのように個別具体的な事柄を振り返っていたわけでは決してなく、去年から今日に向かって起こった一つの円転運動について考えていた。あるいは、漠然とその円転運動の始まりである去年の今日の自分について思い返していた、と言った方が正確かもしれない。

昨年今日、私は今と同じように空を見ていたはずだ。それが日本の空であろうと欧州の空であろうと関係なく、同じ空を見ていたということが重要であり、今は同じ空から違うものを汲み取っているということが大切だ。

欧州に来てからしばらくの間、私はなぜだか空をよく眺め、特に飛行機雲の行方を見守ることがよくあった。ここ最近は何っきりそうしたことが少なくなっていると思いながら、先ほどはずっと飛行機雲を眺めていた。一筋の長い飛行機雲が空に見える。それは東から西へ動いていた。

飛行機雲の先端がどんどん西へ伸びていき、最後尾の飛行機雲がゆっくりと消えていく様子をじっと眺めていた。その時の私は、人生の中でそれしかすることがないかのように、飛行機雲の動きだけをただ見つめていた。

昨年今日から今年今日にかけて、地球は確かに一回転したが、果たして自分の内側ではどれほどの円転運動があったのだろうかを考える。昨年今日の私と今年今日の私を眺めた時、巨視的な観点から眺めるとそれは同一の地点にあるかのように見える。しかし、微視的な視点でそれらを眺めた時、その位置にズレがあることがわかる。このズレが私にとっては大事であった。

この一年間の期間において、私は確かに円転運動を行っていたようなのだ。それを証明するのがまさに、同一地点に自己がいるような感覚と共に、同一地点ではなく、昨年の自分と近いが異なる位置に今の自分が存在しているという確かな感覚である。

「ああ、確かにポアンカレの帰帰定理は、定理として存在し、それは自己の内側に流れている」という思いがやってきた。いついかなる瞬間もそれは自己の出発点であり、ひとたび出発をすると、二度と同じ場所には戻れない。以前と近い位置に舞い戻りながら、私たちは帰着のない出発を繰り返していく。これはある種の永劫帰帰なのだろうか。

無限に繰り返される出発の連続こそ、発達の本質的な姿なのだろう。人は常に出発をしているのだ。そして、その出発に真に気づくとき、それが真の出発になる。そのようなことを思う。

一年、また一年と時を刻むことに合わせて、私はあとどれほどの円転運動を行うのだろうか。先ほど眺めていた飛行機雲の進行方向と同じように、私は数年後に、西へ進み再び米国の地に足を踏み

入れるような気がしている。そこで経験する円転運動は、これまでにないものとなるだろう。そのようなことを今から思う。2017/5/17

1078. 多感覚的文章と探究活動について

漠然と、「見つめる文章」「聞き入る文章」「香る文章」「触れる文章」「味わう文章」などについて考えていた。それらはどれも私たちの五感と密接に関係した文章だ。五感覚を刺激するような文章と出会うとき、私は食い入るようにそれらの文章に夢中になることがある。どうやら、自分にとっては、五感覚を刺激するような文章は「食い入る」ように「味わう」対象なのだということがわかる。

そして時折、五感を超えて、第六感を刺激するような文章が稀に存在することも知っている。それは、五感覚を通じてでは決して感得できないような文章だ。それは存在や生命が宿るような文章であり、私はいつもそうした文章から大きな励ましを受ける。今日もそのような一日だった。

午前中、私は第二弾の書籍の細かな修正を行っていた。その作業が完了した時、気が早いのだが、第三弾の書籍について思いを馳せていた。すでにテーマは決まっており、書く内容についても大枠が固まっている。だが、その大枠を埋めるための密度を確保することは、今の自分にはまだ実現できない。実現させようとする密度とどれだけの隔たりがあるのかを確認するために、この夏に原稿を書き始めてみるかもしれない。

半年ほど前の私は、この夏に第三弾の書籍の原稿を全て書き上げることを決めていた。しかし、今の自分の内面の成熟度合いを持ってして、実現させようとする内容を納得のいく形で書き上げられるのか少しばかり懸念が残る。第三弾の書籍に関しては、正直なところ出版をそれほど焦っていない。焦ることなく、深めていくべきことを愚直に深めることを最優先としたい。そのようなことを思っていた。

そうしたことを可能にするが、まさに今行っているような探究活動であることは間違いない。ただし、しばらく前から、「探究活動」という言葉の持つ意味が変化し始めている。一昔前、私はこの言葉を使うことは一切なかった。ある時から突然この言葉を使うようになり、今は当初とは異なる意味をそこに付与しているような気がする。

そもそも、一昔前に私がこの言葉を一切使わなかったのは、「探究活動」という言葉がひどく自己中心的な意味を持つような気がしており、それを少し嫌悪していたからだ。しかし、ある時からその言葉の中に新たな意味がもたらされた。探究活動というのは、決して一人の人間の内面世界で完結するような閉じられたものではなく、全く逆に、多くの人間の内面世界に向かって開かれたものなのだと思った。

絶えず読み、絶えず書くという生活を欧州で孤独に送る中で、このような生き方でいいのかと思いつつ悩む瞬間が幾度となく訪れた。だが、今は確信に満ちている。絶えず読み、絶えず書くという生活を通じて、この世界に深く関与することが可能であると明らかになったのだ。己の探究活動が、他者の内面世界や外面世界に向かって開放されていく道をようやく見出したのだ。

今は、物体に触れるよりも明確に、世界に触れているという確かな感覚がある。こうした感覚こそが、私を安らかな気持ちにさせ、同時に、熱情的な気持ちにもさせる根源なのだと思う。2017/5/17

【追記】

上記の日記では第三弾の書籍について言及しているが、もう単著で書籍を書くことはないと思う。現在二冊ほど共著として書籍の執筆を進めているが、今後書籍を書くとしても共著の形を取るように思う。仮にいつか単著の書籍を書くことがあったとしても、純粹に成人発達理論だけを取り上げるようなことはしないだろう。成人発達理論はもはや熱を上げて取り組むべき対象ではなくなっている。今後も完全に当該領域から離れることはないだろうが、これまでとは異なる付き合い方で当該領域に接していくことになるだろう。その接し方はもうすでに日々の生活の中に現れ始めている。

自己が変容すれば関心も変容するのが当然であり、関心との向き合い方が変容するのも当たり前である。また、変容が深ければ深いものであるほど関心の変容も大きなものとなる。上記で用いている「探究活動」という言葉を今も使うことがあるが、その言葉よりも遥かに重要なのは「創造活動」である。人は探究をしていては発達をしない。創造を通じて発達する。そのようなことを今は思う。フローニンゲン:2018/6/9(土)15:41

起床直後、部屋の窓を開けて新鮮な空気を取り入れた。五月も半ばを過ぎ、ようやく早朝の寒さも無くなったため、朝起きてすぐに窓を開けるようになった。窓を開ける時、東の空から太陽が昇るのが見えた。じんわりと明るい色を発する朝日を見ていると、今日という一日がまたゆっくりと始まることを実感する。

何種類かの小鳥たちが、それぞれ異なる鳴き声を発している。その声が早朝の清澄な空気に染み入るように広がっていく。私は、早朝の太陽を拝み、朝日に向かってまっすぐに伸びていくような高らかな小鳥の鳴き声を聞きながら、一日を開始する覚悟を持った。

昨夜は夢の中で、私は学校の教室で生徒として授業を受けていた。私の夢は教育に関するものが多いことに気づく。昨日見た夢の中には、幼少期の頃にお世話になっていた先生や当時の友人たちが現れていた。そうした夢とは異なり、成人教育に関係するような夢を見ることもある。

夢の状況設定を分類してみると、教育に関する夢は頻繁に現れる。それを考えてみると、子供の教育や成人の教育に関心のある私の傾向と夢の傾向は足並みを揃えている。もう一步踏み込んで考えてみると、顕在意識にせよ、無意識にせよ、なぜ教育というテーマが私にとって重要なのかという問題に突き当たる。今の私は、こうした根源的な関心は、自己の根幹と密接に関わったものであるとしか言いようがない。そして、このような主題こそが、自分の人生をかけて取り組んでいくべきものなのだと思う。

昨夜の夢では、一人の友人が、先生からの質問に窮している場面に出くわした。先生からの質問は、それほど難解なものではなかったが、その友人は質問に答えることができないでいた。先生からさらに別の質問が何個かその友人に投げかけられたが、状況は同じだった。先生は少しばかり呆れた表情をしており、一方、その友人は首をかしげていた。

友人が首をかしげる様子を見たとき、彼の心中は、「なぜ自分はそのような質問に答えられないのだろうか？」という自己憐憫に満たされているように思った。同時に、その友人の姿をじっと見ていた私は、「質問に答えられないことを気にする必要は一切ない。なぜなら、その質問が発せられた領

域は、君の特性が発揮される場所ではないからだ。君が生きる場所はもっと別のところにある」というようなことを考えていた。

私は、その友人の個性が発揮される場所はもっと別のところにあることを知っており、それを見抜けない先生に対して若干残念な気持ちになり、また、持って生まれた才能に気付いていない友人にも残念な気持ちになった。教師が生徒の才能に気付かず、生徒も自分の才能に気付いていないという構図がそこにあった。夢の中の私はそうした構図を読み取りながらも、先生に対しても、その友人に対しても何の言葉かけもしなかった。

夢から覚めてみて、私は、夢の中の自分に対して残念に思った。それは、行動力のなさであり、自分の気づきを現実世界の具体的な行動として具現化させなかったことに対するものである。それは残念な気持ちというよりも、夢の中の自分に対する憤りのような感情であった。夢に現れた事柄に対する気づきを、現実世界の中で行動として具現化させていくことの重要性を改めて感じさせるような夢であった。

自分の中で教育への関心が高まるということは、それに伴って、教育への関与を高めていくことが必要なのだと痛感させられる。教育への関与という実践が、まさに今日の午前中からの仕事に反映されていないなければならない。2017/5/18

1080.「サンプルアプローチ」を導入した大学入試の選抜方法について

今日は六時前に起床し、早朝から論文を三本ほど読み進めていた。それは現在履修している「タレントアセスメント」で取り上げられているものである。最初の論文は、このコースを担当するスーザン・ニーセンとロブ・メイヤー教授が執筆したものであり、その次に目を通した論文は、二人の論文に対して建設的な批判が加えられたものである。また、最後に読んだ論文は、その建設的な批判に対してさらに二人が意見を述べるというものであった。一連の論文を読みながら、いろいろなことを考えさせられた。

まずは内容として、それらの論文で扱われていたのは大学入学の選抜方法に関するものであり、これらの論文は重要な示唆を与えてくれる。高校時代のGPAや筆記試験などの旧態依然とした評価

方法の信頼性と妥当性を科学的に検証し、「サンプルアプローチ」というユニークな方法を提唱していることが印象に残っている。

論文を読みながら、私たちの知性や能力、そしてモチベーションというものが、領域全般的なものではなく、領域固有的なものであるがゆえに、旧態依然とした選抜方法では随分と多くのことを見逃してしまうと改めて思った。サンプルアプローチとは、例えば、心理学を専攻しようと志す高校生に対して、入学前に、実際に大学が提供する心理学のコースを模した学習機会を与え、そこでのパフォーマンスを評価するようなものを指す。

既存の選抜方法で課せられる各種のアセスメントは、知能検査のような領域全般型の特徴を帯びており、それでは領域固有に発揮される私たちの知性や能力を正しく測定することなどできない。サンプルアプローチを導入するにあたっては、費用の問題も含め、色々と解決していかなければならない課題があることは確かだが、私たちの知性や能力、そしてモチベーションというものが本質的に領域固有な特質を持っていることを考えると、サンプルアプローチは理にかなっていると言えるだろう。

オランダでは、少しずつサンプルアプローチの考え方が広まっているようであり、その流れは欧州にも広がりつつある。三本の論文を読む限りでは、米国の教育界はまだサンプルアプローチをそれほど認知していないようである。日本も大学入試の選抜方法が変革期に差し掛かっており、今後サンプルアプローチに対する認知が広まっていくのではないかと思っている。そして、サンプルアプローチが持つ発想と方法は、大学入学における選抜だけではなく、企業社会における選抜やパフォーマンス測定に重要だと思われる。

最後に、この論文を読みながら思ったのは、二人の論文が2017年に投稿されたばかりであるにもかかわらず、すでに建設的な批判が寄せられていることは非常に健全だということだった。論文で扱われているテーマが教育において重要であるがゆえに、また、論文の中で提唱されているアプローチが斬新なものであるがゆえに、建設的な批判がすぐに寄せられるというのは大切である。そのような批判がなければ、科学的な知が新たに積み重ねられることも、新たな実践がなされることもないのだと強く思う。2017/5/18